
異界の狗

蓋島尻歩

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

異界の狗

【Nコード】

N5506C

【作者名】

蓋島尻歩

【あらすじ】

突如異界に足を踏み入れてしまった二人の男。そこは、地獄の入口であった。恐ろしい連鎖の罠に嵌った二人の男の運命は……。

「ここは、一体、何処だ」

桜井は、呆然として立ち尽くした。

突如として、はめ込み式屋台の寄せ集めのような空間が、眼前に広がったのである。

桜井は、戦場の報道カメラマンであった。

戦場は、死屍累々とした修羅場。生き延びるために、形振り構わぬ所業を強いる鬼畜の世界であった。

戦場から帰還した後は深酒するのが常であった。とことん酔いしれ、疲れきった精神にしつこくこびり付いた垢を落とす。

そうして、夢と現実の狭間で良い気分にはまり命を洗濯し、また明日への活力を培うのだった。

しかし、今回は、活力を培うどころか、それが取り返しの付かないほどの仇となった。

得体の知れない空間を眼の前に、そうそうのことには動じないはずの桜井が、怖気づいていた。足を、竦ませていた。本能的に、身の危険さえを感じたのである。

桜井のそんな混迷を余所に、牟田は呆けた顔をして、頭を桜井の右肩に凭れ掛けてふらふらしながら立っている。

「うつ？ 何だって……ひくっ……」

すでに泥酔の域の牟田は、左の掌で、鼻梁からずれたメガネをだらしないう素振りに戻しながら言った。時折、膝をガクリといわせている。

「……どうしたって、いうんだ……うん？」

と続けて、牟田は前方の光景を見た。

「な〜んだ、あるじゃないか、美味そうな、飲み屋が」

「ちよつと、待て」桜井は、よたよたと前に出ようとした牟田のステンカラーコートの袖を掴んだ。牟田は、それを振り払おうとする。

「ちょっと待てって、言っているんだ」

桜井は一步も引かぬ口調で言いながら、素早くコートの襟に持ち替えて後ろに強く引いた。その拍子に、牟田は大きく仰け反った。桜井は、牟田が倒れる寸前に引く手を弱めると、そのまま離れた。

「美味そうな飲み屋が、あそこに……あると、いうのに……ひくっ」牟田は、桜井の腕力に怯みながらも、向かいの煤けたどでかい赤提灯を弱弱しく指差し、物欲しそうに言う。

桜井は、いつもなら、『酒に卑しい奴だ』と一笑に付すところだが、今はそれどころではない。自分が置かれている状況の把握が先決であつた。

“此処”は、辺り一面、ブラックライトで照らされているように茫漠と烟っていて、狭小なトンネル状の空間のように広がりが無い。背後を見れば、二十メートルほど小路が続き、その先は靄のような物が立ち込めている。

桜井は、靄の先に何があるのか、確かめたい衝動に駆られたが一先ず抑え込んだ。

反対側を観ると、小路の終点と思しきあたりは、背後と同じようにぼーっと靄が立ち込めている。

この“トンネル横丁”は、長さは五十メートルほどだろうか、自転車が三台ばかり並んで走れるくらいの幅の小路の両側に、どう見ても大正後期か昭和初期の造りと思える四十件程の飲み屋らしきが犇き合つて軒を連ねている。

そのうち、光が見える店が三軒ある。

それは、どでかい赤提灯の店、数件先の軒燈を照らした黒っぽいのれんの店、そのまた数件先のくすんだ黄色い電燈を灯した看板の店であつた。

あとは、薄暗がりの中でよく識別できない暖簾や、無発光の電光看板が見えるだけで、何故、この三軒だけが明かりを灯しているのか、恐ろしく不気味なのである。

中でも、とば口にある、このドテボテのどでかい赤提灯の薄気味悪

さは、他の比ではなかった。

それは、身の丈一・五メートルはあり、人間のあばら骨のような骨組みでできていた。

張りぼての中では、今にも消え入りそうな薄暗い光をゆらゆらと発し、上張りには、ミミズが這ったような墨字で『じごく屋』と書かれている。

この赤提灯は、この飲み屋街の入口番人でもあるかのように陣取り、桜井達二人が迷い込んでからというもの、時折、僅かにぶるぶると震えるのである。

その挙動は、まるで、二人を値踏みでもしているかのようなものであったが、桜井は気がついていない。

その先の黒っぽい暖簾にも棚名があるようだが、ここからでは判別できない。

くすんだ黄色の電光看板にも文字らしきはあるが、視認できない。そして、天。

漆黒に近い濃い紫がかった空には、星一つ、雲一欠けらも見えない。天上へは飛び上がれば手が届くようで、空気の流れが感じられず、匂いもしない。

空気は、海辺の町ならば潮の匂い、飲み屋街ならば酒臭や路端を流れる汚水の臭い、戦場ならば血の臭いなど、その地特有のにおいがある。

だが、此処の空気は生き物を生かすだけの役目以外ないように、ボンベの中に充填された酸素さながらに振舞っている。

さらに、この地面、スポンジの上にもいるかのような、ふわふわとした奇妙な感触がする。

桜井が地面に片膝をつき右手で表面を擦ってみると、一見、苔むした土壌のようなのだが土気がなく手が汚れない。陸に生えた肉厚の藻を模した、合成の作り物のようだった。

桜井は、子供の頃に通った “ からくり屋敷 ” を思い出していた。

「ここは、いつたい……おや？」

桜井は立ち上がり、再び前方に眼を向けた。靄の中心が大きくゆつくりと、渦状に回転している。

ついさっきまで、ぼーっと立ち込めていた靄が、中心部を吸い込むように、観覧車より少し早い速度で左に回転している。

振り返ると、後方の靄も同じように回転している。

桜井は、恐ろしいことが惹起する予感がした。今まで経験したことがないような、恐ろしいことが。

戦場という修羅場を幾度となく潜り抜け、研ぎ澄まされてきた桜井の直感であった。

『落ち着け。 “ 出口 ” が、必ずあるはずだ』

桜井は、自分に言い聞かせる。

桜井は、時を遡って考えた。今、腕時計の二針は十二時十五分を指している。

気が付いた時には、牟田とともにこの異様な空間にいた。

今の時間が正確ならば、二軒目の飲み屋を出たのが午後十一時三十分過ぎ、千鳥足の牟田と、三軒目を探して徘徊した時間が恐らくは二十五分か三十分、とすれば、この空間に入り込んだ時間は、午前十二時頃になる。

人通りが途絶えた新宿のビル間の隘路を、牟田を抱え外壁に肩をぶつけながら歩いていた事は憶えている。

とすると、あの隘路のどこかに、此处に通じる入り口が……。

今この位置に立っているという事は、後方の靄が入口なのか、そして前方の靄が出口なのか。それとも……。

「早く、行こうよ、もう一軒、あの店で、いいじゃないか、あの店でさあ」

牟田は、下手に出て、おねだりするように言った。

「ちつ、少しは、酔いを醒ましたらどうだ」

桜井は、腹立ち紛れに言った。

「何だよ、入らないのかよ、じゃあ、何でここに、来たんだよ」

牟田は、聞き分けのない駄々っ子のように管を巻いた。

「何で、ここに来たかって？　それは、こつちが聞きたいくらいだ」
桜井は声を張り上げ、牟田の左肩を小突いた。牟田は、反動でよるめきながら尻餅をついた。

「そんなに、邪険にしなくったって、いいじゃないか。俺は、もう少し、飲みたいだけなんだ、もう少し……」

牟田は、だらしなくうな垂れた。

「本当におめでたい奴だ、お前は」

桜井は、哀れな者でも見るように情けない表情をすると、深く溜息を突いた。

と、次の瞬間――

桜井は、再び、ただならぬ気配を感じ前後の靄に目を向けた。さつきより、回転の速度が増している。じっと見ていると、今にも吸い込まれそうになる。

桜井は、靄から逃げるように眼を逸らすと歩き出した。

「ようやく、飲める、のか……」

牟田は、桜井を見ながら言った。

「いつまで、そんなことを言っているんだ。とにかく、早くここから出るんだ」

桜井は、ふわふわの地面を足早に歩を進めた。赤提灯は、とうに過ぎていく。

「出るって、おい、どこへ、行くんだ。そつちじゃ、ないぞ」

牟田は、尻餅をついた身体を起こし、どたどたとした足取りで桜井を追った。

「とにかく、出口だ。まずは、前方の靄を探るぞ」

桜井は、振り返りもせずと言った。

「おい、そつちじゃない、赤提灯だ、赤提灯」

牟田は、桜井に追いつくと、肩を鷲掴みにして言った。桜井は、肩透かしをして牟田を躲した。

「そつちじゃないってば、赤提灯でお前と、一緒に飲むんだ。お前と一緒にでないと、駄目なんだよ」

牟田は、涙声で、なおも桜井に追い縋った。

「何を言っているんだ、お前は。もう、勝手にしろ」

桜井は、縋る牟田を振り払って進んだ。

「ちき、しょう……」

牟田は半べそをかいて、その場に坐り込んでしまった。

桜井は、前方の靄の渦の三メートルくらい手前で足を止めた。これ以上近づくと、靄に呑み込まれそうな気がしたのである。

渦は、丁度桜井の目線あたりで、ゆっくりと左に回転している。

桜井は、渦の中心に眼を凝らした。これは、ただの靄じゃない、桜井の五感は理屈抜きに、そう訴えていた。本能的に、靄が身体に接触することを拒んだ。

靄が桜井の心の一瞬の隙を付くように、足元に纏わり付こうとした。桜井は身構えながら、一、二歩、飛ぶように後じさりした。

靄は、桜井の動きに呼応するように後を追いつ、また纏わり付こうとする。桜井が、さらに一、二歩後じさりとすると、靄は後を追いつのを止めた。

今度は、靄に向かって右の足を、さつ、さつ、と踏み出すようにフエイントをかけた。

靄は、一部を太いカタツムリの角のような形で瞬時に突き出させ、引つ込ませた。

その一連の動きは、まるで、意思を持つ生き物のようであった。

「何なんだこいつは、まるで生きてるようだ」

桜井は、怯えた表情で呟いた。

桜井は、さらに二、三步退き、ジーンズのポケットからハンカチを取り出した。

ハンカチを投げやすいように固結びして、靄の渦の中心に向かって放り投げた。すると、ハンカチは、渦の中へすーっと吸い込まれていく。

それは、排水溝に水が吸い込まれる様に似ていた。

次は、ボールペンをネルシャツの胸ポケットから抜き取り、渦の中

心に向かつてすくい投げの要領で放り投げた。結果はハンカチと同じであつた。

桜井は、慚然として身を翻し、後方の靄に向かった。坐り込んでいる牟田の前を通り過ぎた。

「だからさあ、そつちじゃないって……言っているのになあ」

牟田は頭をだらしなく垂れながら、声を搾り出すように言つた。桜井は、一向に気に留める様子を見せない。

後方の靄も、意思ある生き物のように振る舞い、桜井が放り投げた百円ライター、ポケットティッシュといった“おやつ”を、あつけなく呑み込んだのである。

「ちつ！ 化け物が、こいつは」

桜井は声を荒げた。

その時だつた――

「だめさなあ、そんちは出口じゃなきゃよ」。無駄んことはやめて、こんちへ寄んなされ」

桜井の背後から、珍妙な訛りのある、年齢も性別も分からない声が聞こえたのである。

二

桜井が恐る恐る声の方に振り返ると、いつの間にか、とば口のどこかい赤提灯の脇に、奇妙な風体の人がたが立っていた。

店内には明かりが灯され、入口の引き戸が半開きになっている。どうやら、二人を店に引き込むつもりらしい。

その人がたの風体ときたら、髪は、頭の天辺で玉ねぎ状にぞんざいに結い、顔は目からは白い手拭で覆われギョロつとした目だけが異様に光り、暗色の緋の着物に灰色の前掛け、っつかけ姿は、これも大正後期か昭和初期の一杯飲み屋のすれた女将のようであつた。

「何、無駄なことだと？ 何者だ、お前は」

桜井は臆せずと言つた。

「まあ、そんな尖がるこたあなきやよ。わしゃ、こん店の女将じゃがな」

人がたは、じろりと桜井を睨んだ。

「女将……」

桜井はそう呟くと、人がたを睨み返した。

「そんちは、一度入りよつたら、抜けられん無間地獄さな。行きたけりや行かせるんも一興じゃが、そんが分かつていて行かせるんも可哀想だでな。うふふっ」

手拭の口元あたりが吐息でかすかに動くと、人がたの目が晒った。

「無間、地獄？」

桜井の目が吊上がった。いつの間にか、牟田が桜井の元に辿り着き、桜井の袖にしがみ付きながら、人がたの様子を伺っている。

「冗談もいい加減にしる。この化け婆が。こっちは、この薄気味悪い空間の出口が知りたいだけなんだよ」

桜井は、酔った勢いでぞんざいに言った。

「うっふふふ、化け婆とな。まあ、面白いこんを言うお人じゃ。じやが、今んところ、出口はないし……ないもんは、教えられん」

「出口が、ない？」

「そんじゃ、ない」

「じゃなにか、ここは出口のない地獄の一丁目ってわけか？」

「まあ、そういうこんだのう」

人がたの眼が嗤った。

「ちっ、ふざけやがって」

桜井は吐きすてるように言った。ふと、霧に眼を向けると、渦の回転はさらに早まっている。

「そんじゃ、時間もちよつとしか残つとらんし」

人がたは、こつくりと頷いて腕を組んだ。

「連れん人も飲み足りんようじゃし、悪いこたあ言わん、さあ、寄んなされ。今日やつとるんはこん店だけじゃ。向こうさ店は、閉め

よったしのう」

そう言うと、人がたは、音も無く店の中に姿を消した。いつの間にか、黒っぽい暖簾の店の軒燈と、くすんだ黄色の電光看板は消えている。

靄の渦の回転は、時間の経過とともに確実に早まっている。

桜井には、一刻も早く此処から脱出しなければ、俗世間への帰還のチャンスは未来永劫失われるような気がしてならない。

『だが、どうやって、此処から脱出を……そうか』

この空間の出口はあの飲み屋の女将が知っている、桜井はそう睨んだ。

「牟田、お望み通り酒を飲ませてやる。但し、お前と酒を飲むのはこれが最後だからな。

金輪際、お前とは飲まん」

桜井は、腕にしがみついている牟田に向かって言った。

「ああ、何でも、お前のいいようにしてくれていいから、とにかく飲ませてくれよ」

牟田は、すでに、プライドも何もかもかなぐり捨てていた。

桜井は、牟田を引き摺るようにして、赤提灯の飲み屋に足を踏み入れようと、店の戸口に立った。

桜井は、啞然とした。

店の中は、特殊効果のように極度にくすんだセピア色をしている。フィルターを掛けられたように、全てがぼやけて見えるのである。しかも、光源らしきはどこにも見当たらない。

店は思いの外狭く、奥行きはせいぜい一間強、間口は一間にも満たないだろう。

カウンターテーブルと壁面間のスペースが極端に狭く、“お客”が坐ると、壁面は丁度良い背凭れになる。

カウンターの中も狭い。

新米の大工が、ついで仕事で取り付けたような棚には、何本かの酒瓶と何枚かの中小皿、コップ数個が置いてはあるのだが、他の調度

品は見当たらない、品書きの一枚もない。

女将は狭いカウンターの中に立ち、酒瓶をテーブルの上に置いて、その口に両の掌を重ね乗せて待ち構えていた。女将の前のテーブルには、コップが二個と棒切れのような箸が二膳、そして小皿が二つ用意してある。

「いらつしやいなあ。まあ、お座り」

と言って女将は、自分の前にある、二脚の枯れ木で作られたような椅子を指差した。

まず動いたのは牟田だった。牟田は、桜井とカウンターテーブルの間をすり抜けて通ると、奥の椅子にちよこなんと坐る。

牟田が坐ると、女将は抱えていた酒瓶を開けて牟田のコップに注いだ。牟田は注がれて早々に口を付け始めた。

「ああ、あ、ようやく、落ち着けた。女将、今日のおすすめは何だい？」

桜井は驚いた。この期に及んで、牟田の落ち着き払った様子は何なのか。

牟田は、慎重といえは聞こえは良いが、元来怖がりで臆病な人間である。何をするにも人に先んじて行動するタイプではない。

少なくとも、桜井と二人の時は、どんな些細なことでも桜井より先に行動することは無かった。なのに、今日は……。

「そっちゃん人も、はよう、お座り」

意表をつかれキョトンとした桜井を、女将は誘う。桜井は、洪々と牟田の隣に坐った。

「今日のおすすめはなあ、イモリの干物と炒りシラミじゃあよ」

なんだと、イモリの干物、炒ったシラミだと？ ふざけるな！ 桜井は心中穏やかざるを堪える。

「うおっ、そいつはおもしれえ、じゃ、そのイモリの干物とシラミをもらおうかなあ」

対照的に、牟田は道化師のようにはしゃいでいる。

「そっちゃん人も、同じもんでよかかう？」

「俺はいい。だいたい、そんな物が食えるか」

桜井は、無愛想に答えた。女将は何処からともなく、二品の“美味物”を牟田の前に出した。

「ほう、こいつはなかなかうめえや、いける」

牟田は、イモリの干物をむしゃむしゃと頬張りながら言った。女将は、それを見て、ひくひくと嗤った。

「俺にも酒をくれないか。旨ければ何でもいい」

桜井は、催促するように言った。女将は我が意を得たりとばかりに頷くと、後ろ棚から、別の酒瓶を取った。栓を開けると、桜井のコップに並々と注ぐ。

「この酒は？」

と、桜井は、水が溢れんばかりに注がれたコップを手に取り、つくづくと眺めた。

「命の水じゃあ」

女将は、そう言って、酒瓶のラベルを桜井に見せた。ラベルには確かに、これもミミズの這ったような墨字で、命の水と書かれている。「命の水？ 取って付けたような名前だな。旨い酒なんだろうな」

桜井は、疑心暗鬼になっている。

「そんじゃ、うんめー酒じゃあよ」 女将はひくひくと嗤いながら、酒瓶をカウンターテーブルに置いた。桜井は、女将の禍々しい腹のうちを探っていた。

「そうか……こいつを飲めば、此処の出口を教えるというわけなのか？」

桜井は、女将に問いかけた。だが、女将は異様な目をギロギロさせながら、相変わらずひくひく嗤うだけであった。

「ちっ、ばかにしやがって、なぞなぞの答えは自分で見つけろということか」

桜井は、コップをぞんざいにカウンターテーブルに置いた。その弾みで、水がコップからこぼれ落ちた。

慌てて、指に付いた酒のしずくをジーンズの腰元で拭き取る桜井。

隣の席では、牟田が、炒ったシラミだというつまみを、舌鼓を打ちながら食っている。

それは、透き通った蜘蛛のような巨大なシラミだった。

桜井は思わず吐きそうになったが、なにより、桜井は、牟田が悠然と喰らう様を見るにつけ、無性に腹が立った。

「お前、よく、悠長に食ってられるな。しかも、そんなものを！」
だが、牟田は、桜井を無視して飲み食い続けているだけである。

「おい、いい加減にしろ。分からないのか、悠長に食ってる暇はないんだぞ」

と言いながら、桜井が牟田の肩に手を掛けた時だった。桜井の手が、牟田の肩をスツと突き抜けたのである。

「なっ、なに！」

桜井は、即座に手を引つ込めた。そして、自分の手の感触を確かめながら、恐る恐る、もう一度試してみた。結果は同じだった。桜井の手は、牟田の身体を通過してしまう。まるで、実体のないホロスコープ映像に手を掛けた時のように。

「い、一体、どうなってるんだ」

桜井は、狼狽えた。だが、牟田は桜井の存在など気に留める風もなく、相変わらず一人で黙々と飲っている。

広大な地の底から響き渡るように、おどろおどろしい低い呻き声が聞こえてきたのは、その時だった。

「なんだ、今の声は」

声の主はいまだ遠くの彼方にあるかに思えたが、こうしている僅かな間にも、呻き声は、少しずつ、少しずつ、大きく強くなっていく。そのことは、その闇の存在の到着が間もないことを示していた。

「うっ、ふふふ、いよいよじゃのう。はようせなあ、手遅れになんさなあ。はっ、はははは……」

未知なる存在への恐怖は、際限なく増大していく。

「女将、此処から出る方法を教えてくれ。あんた、知ってるんだろ」

桜井は声の震えを抑えきれない。

「此処ん出る方法じゃと？ そんりゃ、あんたんが一番知つとん事じゃなあ」

「俺が一番、知っている？ それは、いったい……」

桜井がそう言い終えないうちに、今度は、桜井の身の回りが、ぶるぶる、ガタガタと揺れ始めた。

「今度は、何だ」

桜井の声は悲鳴に近い。落ち着き無く眼をきよろさせ、カウンターテーブルに両手を載せて身を支えている。

「まあ、外を見んなされ」

女将は桜井をじろつと睨み、長く節くれ立った枯れ枝のような指を外に向けた。

桜井は操られているかのように立ち上がり、ふらふらしながら外に出る。

「こ、これは……」

桜井はその場で固まった。

天上はメラメラと燃えるように真っ赤に染まり、靄は邪惡な闇への入口の如くにどす黒く変色し、狂ったように回転している。

しかも、前後の靄はこの店の軒先に向かってどんどん近づいている。間もなく、この店の丁度真前辺りで、前後の靄が衝突することになるだろう。

その時に何が起こるのか、想像するだけで恐ろしい。

桜井は脅えていた。

「うっふふふ」

女将は、桜井を横目で睨み薄笑いをした。

「さあ、どうするのじゃのう」

地の底からの声は、ますます大きくなっている。

天井は燃え、靄は強風を受けた風車のように回転し、この空間全体がゆらゆらと陽炎のように揺れている。

「くそっ！」

桜井は血相を変えて店の中に戻った。すると、目の前にいるはずの牟田が消えている。

いったい、牟田はどこへ消えたというのか。しかし、状況は、桜井に牟田が消えた理由を考える暇を与えない。

桜井は、カウンターに置かれた一口も付けていないコップを取り、口元に持っていった。その拍子に、水がコップから幾らか零れ落ちた。

桜井は、一瞬躊躇いながらも一気に水を喉に流し込んだ。

水を飲み干した直後だった。桜井の目の前の空間が歪み始めた。

桜井の身体が、空間ごと渦に呑み込まれようとしていたのである。

「う、ふふふ……はっ、ははは……」

女将が、断末魔を締め括るように哄笑した。

突如、桜井は目の前が真っ暗になった。

全身の感覚が失われ、その身が奈落の闇の底に突き落とされたような衝撃を受けた。

空間が、渦に完全に呑み込まれたのである。

桜井は、呑み込まれる寸前に、最後の抵抗をなす獲物のように絶叫した。

三

桜井は、自宅のベッドにいた。

全身に妙な違和感があった。頭から下が、自分の身体ではないようなのである。

「痛っ、たたた……」

少しでも四肢を動かすと、全身に電気ショックのような痛みが走る。

『どうなっちまったんだ、俺の身体は』

桜井は、手術後、麻酔から覚めた直後の患者のように身体を硬直させた。

昨夜の事は、飲み屋を梯子し酔い潰れてしまったことしか記憶にな

い。

『俺も、いよいよ、年貢の納め時か』

桜井は戦場カメラマンらしくらず弱音を吐いた。だが、そう吐いた矢先から、嘘のように、全身の違和感が薄らぎ痛みが治まっていく。運命は決して、恐怖の苦悩から解放してはくれないのである。

桜井はベッドから抜け出てよたよたと洗面所に向かった。水道の栓を引き上げ、勢いよく流れ落ちる水を右手で掬い顔面に当てる。

そのまま鏡を覗き込んだ。鏡に映った自分の面相は、一氣に一回りも老け込んだように見える。

『いったい、昨夜、何があっただんだ……』

桜井はTシャツの袖で顔面の水を拭いベッドに戻った。

天井のいびつな形をした黒い染みをじっと見つめていると、次第に睡眠薬を飲まされた時のように意識が朦朧とし深い底に沈んでいく。意識の底には、薄暗いトンネルのような空間が広がっていた。

人間のあばら骨のような骨組みでできたどかい赤提灯、くすんだ黄色い電燈を灯した看板、ブラックホールのような渦、いかがわしい飲み屋、薄気味悪い女将、めらめらと燃える天上、水を手にとっている自分の姿、絶叫している己の姿が、次から次へと空間に映し出されていくのだった。

そして、地の底から聞こえる正体不明の呻き声、空間に呑み込まれる寸前の衝撃……。

「はっ」

桜井の眼前で閃光が走った。思わず目を見開く。息は荒く、額と背中にびっしりと汗をかいている。

「無間、地獄……」

桜井は、全てを悟った。封じ込められていた記憶が、一拳に呼び覚まされたかのように。

地獄——そこには、非業の死を遂げた人間の魂が彷徨う。

魔物は、それら魂を永遠に地獄にとどめ置き苛めながら、さらに深い暗黒の底に落としめるのだった。

だが、地獄が深い暗黒の底にあればあるほど、秩序が保たれるという皮肉。

しかも、秩序を保つために在る魔物は、人間を喰らうことで生き延びるという悪魔の循環であつた。

果たして、魔物に人間の味をしめさせたのは人間自身であつた。人間の向こう見ずな行動が、魔物に人間の美味なるを教えたのである。だが、無闇に人間を地獄に誘い込むことは出来なかつた。

現世と地獄の間には結界が存在し、地獄と現世両方の特性を有つた亜空間質の迂回路を介さなければ、人間を誘い込むことはできなかつたのである。

その迂回路が、『入口』であつた。

地獄の入口に入り込んだが最後、助かる道は一つ。

自らが水を飲み、身代わりも水を飲むことだつた。これ以外に助かる道はない。

そうすれば、自らの現世での寿命は戻り、身代わりには現世で一年だけ命が与えられる。

身代わりは、その一年の間に、自分の身代わりを探し出し入口に誘い、水を飲ませるのである。

もし、二人とも水を飲まなければ、自らが地獄に堕ちることになる。自らが水を飲み身代わりが水を飲まなければ、二人とも地獄に堕ちることになる。

つまり、自らが水を飲めば、身代わりも水を飲まざるを得ないということになる。これは、身代わりが先に水を飲んでも同じであつた。地獄に堕ちた者は、地獄の魔物の餌となり、五体が喰いちぎられても苦しみもがきながら、永久に地獄を彷徨い続けるという恐ろしい運命が待っている。

肉片が地を覆い尽くし、血が雨となり腐臭が風となる忌まわしくもおぞましい暗黒の空間、それが無間地獄であつた。

罅に堕ちた者は、命惜しさに形振り構わず “身代わり” を探し出し、地獄の入口に誘い込もうとする。

まさしく人間の生への執着、あさましい本性を巧みに利用した邪悪な連鎖の罠であつた。

牟田は、自分の寿命を取り戻すため、桜井を地獄に入口に誘い込んだのである。

そして、水を飲んだ……。

牟田の悪魔のような喜びが、目に浮かぶようであつた。

牟田に良心の呵責がなかったわけではない。だが、地獄の生贄になる恐ろしさは、牟田をして、己の命を最優先させたのである。

桜井は、信じざるを得なかった。身も凍る恐怖が、津波のように押し寄せてくる。

過去から現在までの人生の一コマ一コマが、スクリーンに映し出されるように脳裏に浮かぶ。

遠い故郷にある父母の優しい笑顔、若くしてこの世を去った姉のデスマスク、愛おしい恋人の微笑、盟友が散った激戦地の惨状、九死に一生を得た航空機事故……場面が、一瞬のうちに浮かんで消え、消えてはまた浮かぶ。

「一体、どうすりゃいいんだ」

桜井は、わなわなと震えながら、絶望と無力感に打ちひしがれた。

「身代わり……俺の、俺の、身代わりは誰なんだ」

捨て身の人生のはずが、生きながら地獄を彷徨うことが無性に恐ろしい。

桜井はベッドから起き上がり、そのまま居間に立ち尽くした。真空の中にいるような静寂が、桜井の身を包み込む。

突如、桜井の拳が小刻みに震え出し、その表情が見る見る険しくなっていく。

戦場ですら見せたことのない、狂気に満ちた桜井の表情であつた。自分を騙し陥れた、牟田への怨念なのか。

連鎖の罠に堕ちた、愚かで無力な自分への怒りなのか。地獄に堕ちることへの、恐怖の表れなのか。

「くそっ！ ぶち殺してやる」

突然、桜井は拳を握りしめ目の前の壁を突き始めた。

ドスッ、ドスッという鈍い音とともにクロスが貼られた石膏ボードの壁があつという間に陥没し、石膏片が床にぼろぼろと落ちていった。

桜井は、そのまま床に坐り込み項垂れた。心は、べつとりとした墨を流し込んだように、暗く、重く沈んだ。

三日後、桜井は中東の戦地に赴いた。二十七回目の赴任であった。戦地での小刻みの仮眠の中、暗黒の記憶がより鮮明に蘇ってくる。恐ろしい、あの記憶。恐ろしい、運命。

戦地で、一週間が過ぎた頃であった。体調が優れず、気分が塞ぎこんでいた。

桜井は、白昼夢を見た。

夢の中で、恋人の久住絵里が優しい微笑を浮かべていた。

その微笑は、戦地に赴く前日に会った折、彼女が見せた愛おしい微笑、そのものだった。

了

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連「横書き」という考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、たんのう堪能してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n5506c/>

異界の狗

2011年11月14日22時57分発行